

私の小さな美術館

新井 満



文藝春秋

私の小さな美術館

新井 満



文藝春秋

私の小さな美術館

一九九六年七月一日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著 者 新 井 満

発行者 和 田 宏

発行所 株式会社 文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町三―三

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

©Man Arai 1996 Printed in Japan
ISBN 4-16-380250-9

万一、落丁、虫丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

私の小さな美術館

*

目次

第一の物語	天の蛇行——富岡惣一郎「雪・信濃川」	9
第二の物語	赤い鼻緒の木履はいて ぼつくり ——屠龍山人笠原鞆「新潟旧万代橋」	21
第三の物語	安吾とサティと——司修「海辺の生活」	32
第四の物語	仮面の誘惑——新谷瑤紀「アライマンのライフマスク」他	43
第五の物語	ドストエフスキーの帰還——グラノーフ「グリバエドフ運河あたり」	54
第六の物語	紫陽花昇天 あじさい ——ミルダム「フィヨルドの皿」	66
第七の物語	花子と月子——藤原新也「フラワードッグ」	77
第八の物語	イカロスの墜落——横尾忠則「青の墜落」	89
第九の物語	遙かなる鳥海山——森敦「浄土」	100
第十の物語	イヴ・モンタンの遺言——J・J・ベネックス「P5」	111

第十一の物語
レセプション——ラウル・デュフィ「レセプション」 122

第十二の物語
サン・テグジュペリの消息——J・F・ドゥマルヌ「陽のあたる場所」 133

ギャラリー 145

第十三の物語
超絶難漢字——吉行淳之介「原稿用紙に書かれた手紙」 177

第十四の物語
大仏の微笑——須田剋太「東大寺雪」 188

第十五の物語
満月に叢雲むらくも——市野豊治「白丹波寮変徳利花入」 199

第十六の物語
ツイオルコフスキーの夢——ガルキン「ツイオルコフスキーの夢」 211

第十七の物語
ラオスから来た少女——作者不詳「チベットの曼陀羅」 222

第十八の物語
G線に出る月——スウィングル・シンガーズ「サイン入りのパンフレット」 233

第十九の物語
アルプスの鐘——安野光雅「アルプスの鐘」 244

第二十の物語
住吉のカッパドキア——安藤忠雄「カッパドキアの夜」 255

第二十一の物語

マリリン・モンローの尻——ジョー・ジ・シーガル「尻と手」 266

第二十二の物語

ジャン・コクトーの帽子——ジャン・コクトー「堅琴をひく若者」 278

第二十三の物語

棘とげの生えた贈り物——マン・レイ「贈り物」 289

第二十四の物語

ソフィアの歌——アヤシエンコ「タ暮れ」 301

「あとがき」にかえて
生きるあかしとしての蒐集

312

装丁 坂川栄治

装画 田谷 純

写真 新井 満（第十三の物語）

山口規子（右記以外のすべて）

私の小さな美術館

ぐあいさつ

本日は『私の小さな美術館』によるこそおいでくださいました。さっそくですが当美術館が蒐集し展示しております美術品のジャンルと、その点数を申し上げます。

●絵画（油彩画、水彩画、ペン画、パステル画、日本画など）が十四点。

●書、版画、写真が各一点ずつ。

●手紙、サインが各一点ずつ。

●陶芸作品が二点。

●彫刻およびオブジェが三点。

以上、二十四点でございます。このように申し上げますと、お客様の中には、「絵画や彫刻ならともかく、手紙やサインのたぐいまで展示するとは、ちょっと珍しい美術館だねえ」と、首をかしげたり苦笑したり呆れ果てたりされる向きもあるかもしれません。ごもつとも。たしかに当美術館は、世界中にあまた林立する（並の）美術館群とは一線を画す、かなりユニークな（というよりは

相当に^い変な）美術館であると（正直に）言わねばなりません。その主たる原因は、当美術館がもっとも力を入れているのが「物語」の発掘にあるからです。左様。即ち当美術館は、見える「美術品」と、見えざる「物語」とによって構成されているのであります。

その美術品たちと、いつ、どこで、どんな出会いをしたのか。蒐^{あつ}めることは、単に所有するだけのことはありません。蒐めることは、同時に未知の世界を発見し驚き創造すること。つまり蒐めることは、人生をより良く生きようとすることでもあるのです。

優れた美術品と情熱ある蒐集者との間には、必ず一期一会ともいうべき運命のドラマが隠されております。蒐集にまつわる前代未聞にして空前絶後の、あるいは冷汗三斗にして摩訶不思議なる顛^{てん}末を、全部で二十四個の物語にしたためました。工夫をこらした展示写真と合わせてごらんいただければ幸いです。

では、正面扉を開けて「第一の物語」のコーナーにお進みください。本日はご来館、まことにありがとうございます。

私の小さな美術館館長 新井 満

初出

文藝春秋

一九九四年一月号～一九九五年十二月号

第一の物語

天の蛇行

私のふるさととは新潟市である。

市内を南北に貫流する信濃川の河口近く、西岸に位置する礎町いしづえに生まれ、長じて礎小学校に通った。あれは小学校三年生くらいの時であっただろうか。担任教師が、自分の背丈ほどもありそうな細長い巻物状のものを持って教室に入ってきた。黒板上方の釘に掛軸でもぶら下げるようにそれを吊し、するすると開きおろすと、やがて日本列島の地図があらわれた。

「しょくん」

若い教師はいくらか胸を張り、こほんと一つ咳をすると、おもむろに口を開いた。

「しょくん。この地図を見たまえ。これが日本列島である。しょくんが住んでいる新潟県はこのあたりにあって、いかにも小さい。しかしこう見えても、わが新潟県には日本一がなんと二つもあるんだぜ」

生徒たちは固唾^{かたず}をのんで見守っている。

「まず日本一大きな島が、佐渡島である。しょくんの中で行ったことのある者は？」

生徒たちは互いの顔を見かわすばかりで、一人も手をあげない。たしかに晴天の日を見計らって海岸へ行くならば、水平線上に佐渡の島影を見ることができ。だが、そこまで行くには小さな汽船で何時間も揺られなければならない。そこは遠い異国なのである。

「もう一つの、日本一は？」

生徒の誰かが叫んだ。

「もう一つはな。ほれ、すぐそこを流れている信濃川さ。全長三六七キロメー

トル。日本最長河川なんだぞ」

思わずしらず教室中の生徒たちはいっせいに窓ガラスの外を眺める。木立や建物に隠れていて何が見えるというわけではないのだが、生徒たちの視線の先わずか数百メートルのところに、今日も流れているであろう川の姿を思い描いてみたのである。

少年の頃、私たちは冬休みになるときまって信濃川べりに行き、終日、風あげをして遊んだものである。遠い海の彼方にある佐渡島とちがい、すぐそこを流れている信濃川は私たちにとって身近な存在であった。

「へえ——っ」

生徒たちは感嘆の声をもらす。なんだか自分たちが日本一と言われたようで、妙にくすぐったい気分になってくるではないか。

「せんせえ、しつもん！」

生徒の一人が手をあげ立ち上がった。

「どうして信濃川は、信濃川なんですかね」

越後のくにを流れて日本海に注ぐのだから、越後川と呼んでも良からうに、と生意気な理屈をこねたのである。教師は一瞬たじろいだ。しかししばらくす

ると静かな口調でこんなことを言った。

「そもそもこの信濃川が、どこから流れてきたか……。それを考えてごらん」

それは信州信濃のくからなのだよ。信濃のくにを流れる千曲川や犀川が源流なのだよ。わが越後が生んだ偉人・吉田東伍があらわした名著『大日本地名辞書』には次のような記述がある。曰く、信濃川はその源を信州に発す、故に信濃川と云う。昔から越後のくの人々は、目の前を流れ過ぎてゆく川を見るたびに、その川の源である遙か信濃のくにの空に思いを馳せたのだろうね。だから信濃川と名前を付けたのさ。つまり君たち新潟県人とはそれくらい想像力豊かな人間だってことだよ。

「せんせえ！ 信濃のくには、佐渡島よりも遠いかね」

「ああ遠いな、うんとうんと遠いな」

生徒たちは一様に黙り込み遠くの方を見つめる表情になった。遠い佐渡島よりもっと遠い信濃のくには一体どんなところなのだろう。きつとそのあたりの山々は高く高く聳え立ち、谷は深く深くえぐれえぐれているのだろうか。森林の奥には熊や狐や狸なんかも隠れ棲み、空には鷹や鳶とんひなんかが大きな翼を広げて旋回しているのだろうか。

国語の時間になった。作文の自由課題に私はこんなことを書いた。将来の夢。いつか信濃川をどんどん溯り、源流を訪ねてみたい。日本最長河川といえどもその始まりは一滴の水にちがいない。いつの日か最初の一滴に出会う、そんな旅に出てみたい。

図画の時間には、信濃川の絵を描いた。とにかく長い、もううんざりするくらい長い長い一本の川の絵であつた。

「なんだか蛇が空を飛んでるみたいだねえ」

肩越しに覗き込んだ口の悪い級友が、そう言って笑つた。

☆

沖縄島が本土に復帰したために、佐渡島が日本最大島でなくなったのは周知の通りである。これによって新潟県人が誇る地形上の日本一は、信濃川一つだけとなった。

新潟には高校を卒業するまでいた。大学は地元にするか東京にするか迷つたが、結局、東京は四谷にあるカトリック系私立大学に入学することにした。以来、ふるさとを遠く離れて三十年あまりが過ぎた。日本各地を転々としたのち、

現在の私は横浜に住み、小説を書いたりレコードを出したり環境ビデオやテレビ特番のプロデュースをしたりして暮している。

作文は嫌いな方ではなかったが、まさか作家になるとは夢にも思わなかった。作文よりは図画の方がうんと好きだった。将来、画家になることができたらどんなに素敵だろう。漠然とそんなあこがれを抱きながら、高校時代の三年間はもっぱら美術クラブで油絵ばかり描いてすごした。だが才能のなさに気づき、大学に入学した早々あっさり絵筆は捨ててしまった。

絵筆は捨てたものの、絵画への熱き思い、こればかりはどうもがいても断ちがたく、渴いた喉が清冽な一杯の水を求めるように、時間を見つけては美術館や画廊を訪ね歩くようになった。

二年ほど前のことである。

銀座通りを散歩しているうちに、四丁目の交差点に出た。角に和光のビルが建っていて、暇つぶしにふと立ち寄ってみる気になった。眼前にエレベーターの扉が開いており、おいでおいでをしている。誘い込まれるように乗り込むと、エレベーターは最上階まで来て止まり、扉を開けた。最上階は美術ギャラリーになっていて、入口の看板に、